

ホームメイのふるさと

text by Shinji Ishii
文いしいしんじ

京都でまわりの人たちに、トゥバにいきます、と自慢げにいったら、ほとんど誰も知らなかった。トゥバ共和国。ロシア中央部の最南端、緯度でいうと北海道のはるか北、樺太の北部。ロシアのキリル文字を使うが、ふだんの会話はトゥバ語。宗教、文化、政治と、ロシア連邦のなかでもとりわけ独自色を貫いている小国家だ。

高校生の頃『トゥバ紀行』という本を読んだ。イギリス人の冒険家が、トゥバの首都クズルに「アジア中心の碑」を建てた。そういわれ、夢がふくらんだ。アジアの中心って、どんなひとがいて、どんなものを食べ、いったいどんな歌をうたっているんだろう！

歌については、大学生の頃、ワールドミュージックの流れで知ることになる。「ホームメイ」という、ガラガラ声の上に一

いる、その空間に満ちた空気すべてがホームメイ化する。演奏家のからだはレコード針のようにそこに立ち、僕たちの世界をひっかいて、そのすき間から、空前絶後の音楽を絞り取る。

二曲が演奏され、拍手が鳴り響いても、会議場の空気はまだ打ち震えていた。これがほんものか、と打ちのめされ、しばらく自分の足で立てる実感が湧いてこなかった。

トゥバの音楽体験が、これだけでおわるわけもない。二日後、有名な歌手オトクンさんの実家に招かれた。巻上さんは25年のつきあいがある。脳梗塞にかかって以来からだの半分が動かしづらいが、表情は豊かで、情に厚く、日本の僕たちにトゥバを気に入ってもらいたくてうずうずしている。

羊一頭を解体し、塩ゆでにしてふるまってくれ。この国で、大切なお客さんをもてなすときはいつもそのようにする。肉が茹であがるまで、オトクンさんがよく知っている音楽家ふたりが楽器を抱えて登場する。ちよūdよい狭さのお座敷で、僕たちお客は車座になって座る。ホームメイを演じ、味わうため、ひとが千年を

種風音のような甲高い響きが重なり、地上にいなながら天空から覗きこむような、ふしぎな音楽をレコードで聴いた。それがトゥバの歌だった。

成田からハバロフスクへ。国内線に乗り換え、シベリア最大の都市クラスノヤルスクで一泊。あとは自動車で10時間南へ走り、トゥバ共和国へはいる。国境を越えるとき、チベット仏教の積み石のまわりを三周し、拾ってきた小石を三つ置く。

首都クズルは、着いてみたら、若い女性にはノースリーブに高いヒールのサンダルだし、男性の8割はアデイドラスやプーマのジャージ姿だ。ただ、顔立ちは、池袋や天神や栄で見かける若者、おばちゃん、おじいちゃんともまったく変わらない。というより、いまの日本で見かける人の顔より、よっぽど日本人らしい顔立ちを

こえて通してきたスタイル。

ホームメイがはじまる。壁が抜け、天井が飛び去る。

空を渡る風、川のせせらぎ。なだらかにつづく丘の稜線。草原を馬の群れが駆けていく。

ここから湧きあがる「なつかしさ」。僕は昔、この歌を聴いたことがある。赤ちゃんのとき、あるいは、うまれるはるか昔。遣伝子にこびりついた遠い記憶が、ホームメイに共鳴し、目に見える意識の上に浮かびあがる。

歌詞なんて知らないはずなのに、ホームメイに合わせて声が出ている。日本人に似ているのでなく、もともと、トゥバの

している。

トゥバ作家会議、という催しに、音楽家の巻上公一さんと出席する。現地の詩人や劇作家が迎えにくれる。会議のオープニングにあたり、トゥバの音楽家ふたりが会議場にやってきて、楽器を構えてすわった。いよいよホームメイがはじまるのだ。

ゆっくりと、それは響きだした。はじめての大地を、ていねいに踏んでいく足取りのようだった。部屋がふるえ、机、ガラスが共振していた。空気が光った。気がつけばそれはひとの声だった。

弦楽器に先導され、目の前を、ひとの声が駆けてゆく。ぐるぐるとまわり、そのうしろに森が、風景が広がる。喉を鳴らす歌、と思われがちだが、目の前で演奏されると、そんな単純なことでない、とじゅうじゅう理解できる。いまここに

ひとのほうがオリジナルの顔だ。僕たちはこのあたりから東へと流れたのだ。

何度も息を呑み、きき耳を立てる。からだで拍子を取り、手を叩いて唱和する。和風の和は、和音の和。中国も朝鮮もキルギスもモンゴルも。ホームメイの響きに包まれ、みながみなひとつになつていく。トゥバの歌は、東西南北つながってゆく大地を、そのまま声で表したものだ。言語がちがっても、歌が、笑顔が、すべてを語っている。この町が「アジアの中心」かどうかは知らない。ただ、ホームメイが響いているなら、そこはいつだって僕たちの、なつかしいふるさとなのだ。



トゥバ共和国
面積: 17万500km²
人口: 30万5,510人(2002年)
都: クズル
語: ロシア語、トゥバ語
区: シベリア連邦管区



Profile
1966年大阪生まれ。京都在住。
著書に小説『ぶらんこ乗り』『麦ふみクーツェ』『ポーの話』『みずうみ』『四とそれ以上の国』など、エッセイ『人生を救え!』(町田康共著)『熊にみえて熊じゃない』『遠い足の話』、絵本に『赤ずきん』(ほしよりこ絵)など多数。